岡山県立博物館だより

7号
3月20日
1975

琴士集あれこれ

館長　村井董直

浦上玉堂には玉堂琴士集という漢詩集前後二集があることはよく知られている。前集には61の詩，大部分は風景を詠んだ詩，後集には78の詩，主として述懐の詩が多い。だが，若干意味不詳の詩があったり，意味はわかるものの詩語として熟していない場合もあってこれで玉堂詩を云々することは早計の嫌いもあり，詩集以外に玉堂はかなりの詩を残しているので，さしあたってこの詩集にかぎってごく大要を記してみたい。

彼がどんなことを志向していたかは，おぼろげながら理解できる。ここで唐宋の詩と比較することは少し酷であるが，強いて言えばあの時代のような悲しみや楽しさを人生の充実だとうけとめている詩，そんな詩は玉堂の詩にはない。むしろ晋の陶淵明，魏の阮籍，さらに隋から唐にかけて酒のなかに自分の理想郷を求めた王績，こういう系列の詩人を思慕する人として玉堂を位置づけるのが適当ではないかと思う。したがって不安，懐疑，絶望という六朝時代の跡もみられない。「絃のない琴に指を走らせて心にその音を楽しんだ陶淵明を師と仰ぎたい」（85）と詠み，彼の残した書に「無欲是吾心，無声是吾畫」というのがあり，「乙卯之秋干会山下」とあるから会津で書いたものだろうし，「琴を弾けば名利を忘れ，無為自然の境地に近づき，官途を辞して帰郷した↗

紙本淡彩　**南村訪雪図**

浦上玉堂筆
岡山県立博物館蔵

玉堂は姓が紀，名を弼，字は君輔といった。はじめ鴨方藩に上えたが，49才のとき脱藩。遍歴ののち京都に落ちつき，琴を友として自適の生活を送った。本図は河本一阿の需めに応じて描いたもの。繊細な筆致ではあるが，幾分単調で，玉堂画の独自性があまりあらわれていない。寛政2年には陽明学弾圧のため一阿の経宜堂も閉鎖されたことなどを考えあわせると，岡山を出奔する以前の多分40才台の作品と思われる。

陶淵明の心境もかくや」（94）と詠み，「愛読の書として老荘の書を床に飾り」（12）とあるあたり，玉堂の本心を語りえているといえよう。

まだ彼が岡山にいた頃，「ようやく旭川にも春が来た。梅は綻び琴を弾き酒を飲む暮らし，これもどうやらほんものになってきた。人は訪ねてこないが遠く龍ノ口山にかかる月の光が私を訪ねてくれる」（10）と詠み，すでに語る友の少なきをかこっているが岡山を遠く離れては，「この月は私の郷里岡山を照らしているだろう。」（91），「この頃の岡山を知りたい」（80）とも，「郷里岡山を出て久しい。あの一別以来またいつ会えるだろう」（133）と彼は一人涙する時があった。また清明〈春分の後15日目，墓参の日〉になっては「家人，生死そむく」（19）と歎き，母の長寿をひたすら祈る玉堂である。とくに後集〈岡山出奔後の作と推定されている〉になると故郷を思う心は格段に強くなっている。一分たたず致仕した彼にも陽明学を学んだ片鱗をうかがうことができる。

こういう彼ながら，自然を見る眼には独特の鋭い感覚，そしてそれは目前の現象をおさえにおさえて，ぎりぎりのところで表現しょうとする不動心をもっていたようである。「春を訪ねて山に行き，酔って寝る。覚めても春はどこにもない。ふと下駄の歯にとどまる草の匂いに，ああ今は春だ」（32）と知る。小手先の技術では詩にまとめることは難しい。「画を描き上げたがどうもなげやりだ。墨と朱がうまくいっていない。技巧に走りすぎる。むしろ画筆を投げすてて，ほんものの山に幾日でも向かいあおう」（50）と。玉堂には「青山を写す」（11）（青山に対する」（74）「真山に対す」（50）という表現が多い。とくに真山といったりするところを考えると，彼にとって山は感覚の世界でとらえられるものではなくて，それを乗り超えたところでとらえていたのではないか。多少，出典は違うが，洞山語録に青山白雲という語がある。青山は理，白雲は事，理と事，正と扁，理想的なものと現実的なものを象徴的にいう語だが，玉堂のねらっている真山とは，目の前の山と雲とを見て，そこに現実ではない理想の山を把えようとしたのだろうか。朝に夕に硯にむかって「真山」をえがこうと「軒端の雲片，壁間の琴」（13）を楽しんでいたのである。そういう把え方が玉堂のものとするならば，〈春琴の書畫論より〉彼の生きた時代に，同じような系統の人がいたかどうかということになると，絵に見識のない私にはわからない。ただ彼の漢詩にみられるかぎり，それを理解する人は極めて少なかったらしい。「門は閉ざされたままで訪ずれる人はいない」（117）ということは彼がしばしば詠んでいるところである。さきに私は陶淵明のことを記したが，そのつぎに玉堂が再度ならず詩に詠みこんだ人名はといえば伯牙と鐘子期をあげることができる。伯牙は春秋時代の琴の名手，鐘子期はその親友である。子期が死に，あとに残された伯牙は「千古無知音」と叫んで絃を断ち切ったという。玉堂にとりこのような親友は求むべくして求められなかったのではないか。「息子の選と私が琴を弾く。こんなに融け合った境地はない。まさに伯牙と鐘子期に比べられよう」（137）とわが子との生活をとおして親友というものを嚙みしめていたように思われる。だから，「千年たっても，この私の心を知ってくれるものがあろうか」（42）と心情を吐露し，「ここに一つの琴がある。私の命である」（102）といって，琴を負い，生涯かけて「住所不定のさすらいの旅」（118）に出る。彼にとっては「一生の計とは何ぞや，そんなものは私にはない」（122）とて「酒を飲み，詩を吟じての暮らし，老の迫るのも知らず，わが道を気ままに歩く」（138）のがそのすべてであったようだ。だが，いかに気ままであろうとも彼にはわが道をしっかりともっていた。決して放蕩な人生ではなかった。それはもう一つの彼の著，玉堂雑記に示される古典解釈の一方法によっても理解されよう。古事記，日本書紀，万葉集をはじめとして徒然草，梁塵秘抄に至るまでの一貫した主張をみればわかることであるが。

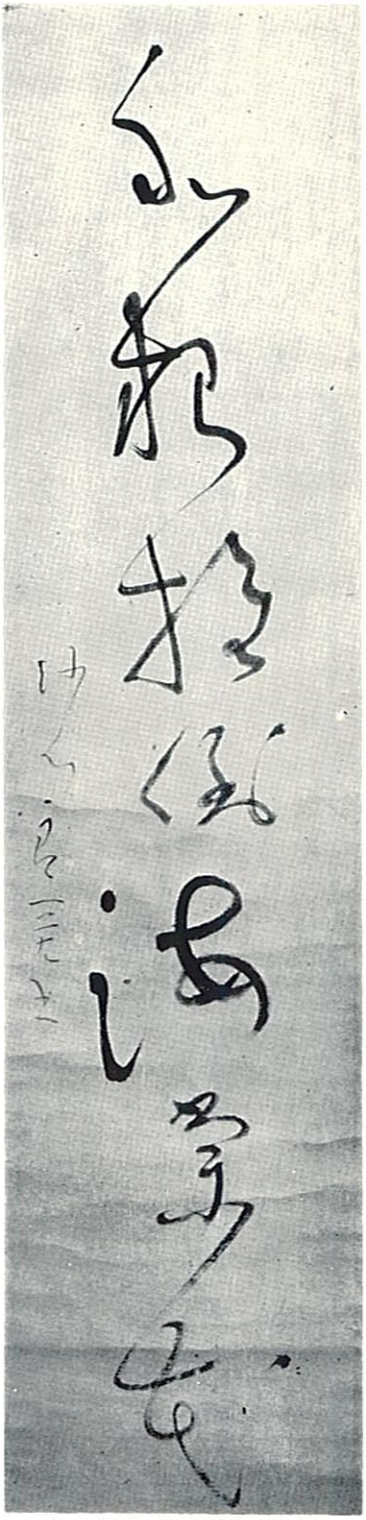
字数の制限もあるので，最後に琴士集冒頭の詩をつけ加えて駄文の終りとしたい。「私の詩はまことに古くさい。しかもその古さに溺れている。かならずといってよいほど詩の中に琴の功徳を説く。私の詩とはそんなもの，詩も私の生涯もどうみてもぱっとしない」（1）と。

（　）内は数字は琴士集前後集を一括した詩番号を示す。

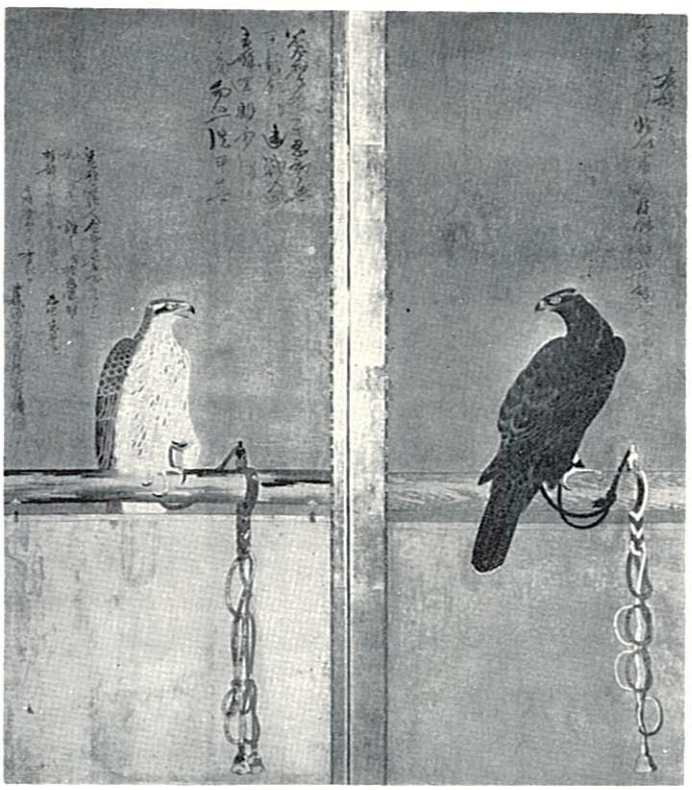
新収蔵資料紹介

子持器台

蔵王権限鏡像



良寛墨跡（和根推到海棠花）



架鷹図（部分）慶長14年　藍溪宗瑛賛　六曲屏風一双

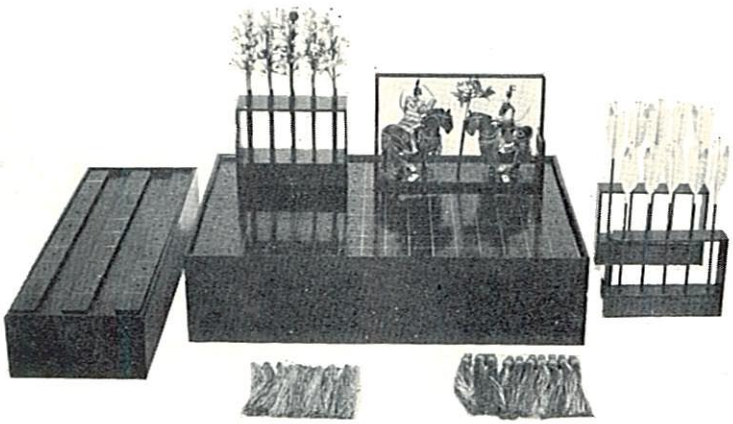
備前焼　鶴首徳利

いわゆる海揚りといわれるもののひとつであるが，海揚りのものに火襷ものが多いなかで赤焼のものとして珍らしいものである。　窯印は扇の地紙

高さ 21.0cm　口径 5,7cm高台径 6.3cm

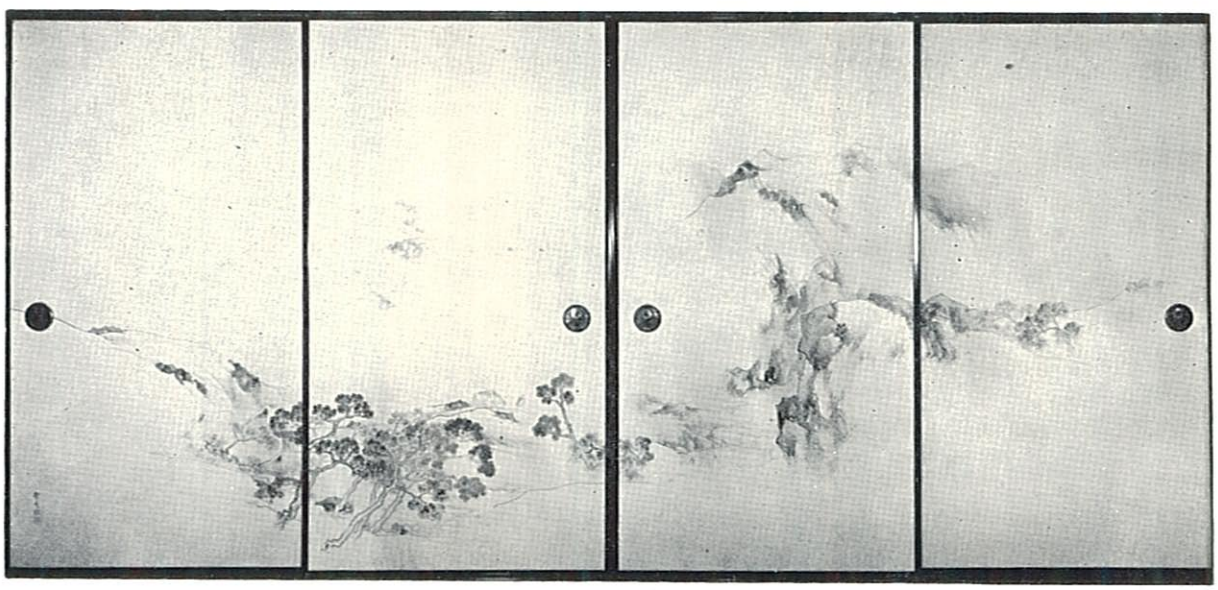
草花蒔絵螺鈿櫃

17世紀の初めにわが国で制作され，海外へ輸出された南蛮スタイルの漆芸品



盤　香　具

江戸末期に用いられた四種盤といわれるもので競馬香など4種類の遊びができる



紙本淡彩　山　水　図　岡本豊彦筆　襖4面

伝統手仕事の復活と維持

「伝統をうけつぐ会」発足

昭和50年度より，博物館普及活動の一環として県内に残存している手仕事の保存と伝承を目的として「伝統をうけつぐ会」主催により染織・竹細工・わら細工・真田組などの技術を習う実習講座を開講することになり第1回として「竹すだれ」の講習が5月より毎週1回約6カ月間行われることになった。ひきつづき染と織，わら細工などを行ない熟練してくれば民俗部門の展示に一役かうことも予定されている。「伝統をすてることは自分の魂を売ることだ」といった人がいるが何事も近代化という一見合理的と思える方向に進んでいる現在，伝統の技術をうけつぎそれをくらしに役立て考えてみることにより自分達の人間性をとりもどしたいものである。

いにしえの吉備人の生活を眼の当りに

――特別展「岡山県の原始・古代」――

（昭和49年10月8日～11月17日）

昨年度の特別展「岡山県の中世」に引き続き，時代別特別展示の一環として「岡山県の原始・古代」展を行った。

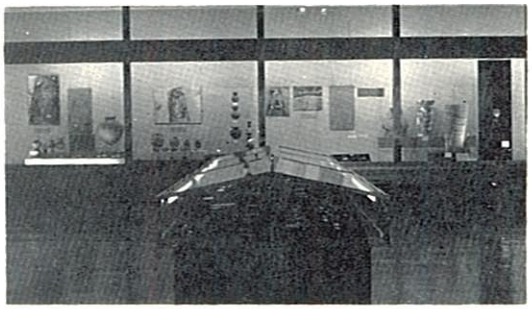
岡山県は，遺跡数の多い県として全国的にも知られている。そして，県内の遺跡や出土遺物は単に岡山地方の古代の姿を示すのみでなく，日本の古代史を研究する上で重要な基礎資料とされているものも少くない。近年，私達をとりまく自然環境は，様々な大規模開発によって変貌をとげ，緑の山々や田園地帯が失れつつある。さらに，自然の中に現代まで残されてきた原始・古代の遺跡も破壊の危機にさらされ，多くの埋蔵文化財が失われてきている。

多くの遺跡は，破壊されることを前提とした発掘調査が行なわれ，それはいわゆる記録による保存方法が取られるだけの緊急調査であった。そのような遺跡からも重要な遺構が検出されたり，貴重な遺物が出土されているが，現状で遺跡そのものが一部でも保存された場合を除いて，それらの遺跡・遺構の多くはすでに私達は見ることができなくなっている。

以上のような現状の中で，今回の特別展示では，県内既出土の埋蔵文化財に加え，山陽新幹線・中国縦貫道建設・山陽団地造成工事に伴なう埋蔵文化財緊急発掘調査などの大規模開発の犠牲となった遺跡の出土品や遺跡・遺構の写真・図パネルなどの公開も兼ねて行なったものである。

展示点数は，国指定重要文化財3件，県指定重要文化財1点，市町村指定文化財多数などを含む約 2,000点（約50件）にのぼった。

なお，会期中，昭和49年10月19日（土）午後1時より，本館講堂において，奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長・坪井清足氏による「考古学よりみた筑紫・吉備・大和」，平城宮発掘調査部史料調査室長・狩野久氏による「吉備地方の古代」という記念講演が行なわれた。



特別展会場の一部

「古文書の解読と鑑賞」

――講座開設――

「伝統をうけつぐ会」の主催で古文書を読む会が近く発足する。これは中世・近世の古文書の解読ばかりでなく鑑賞も加味した講座としてゆく予定で関係者から期待されている。毎週1回当館講堂において高校生以上の希望者を対照にしテキストは当館の用意したものを用いる。受講料は無料，受講者は実費を負担することになっている。講師は学芸課三好基之主任。

歴史を学ぶうえに古文書の解読は不可欠のことであり解読力を修得することにより資料の発見と保存はもちろん活用にも役立てることができるわけである。

資料紹介

——室町中期の優品——

備前焼　四耳壺

応安4年（1371）に今川貞世によって書かれた「道ゆきふり」（塙保己一編群書類従第18輯日記部紀行部巻第333）に「さてかがつといふさとは。家ごとに玉だれのこがめという物を作ところなりけり……」という一文がある。この"玉だれ"という表現こそ，この文明銘四耳壺に流れるビードロを表現したものである。

この時代は，鎌倉時代以来大衆化されつづけてきた陶器の需要が，一層飛躍的にのびた時代であった。つまり，供給側から言えば，その需要にこたえるため，量・質共に焼成の効率を高めようとする努力がなされた。①大量生産のための窯の大型化，②高温焼成をむらなく行なうための窯内構造の工夫，等々である。

④　自然降灰がビードロ釉となって流れるためには1200°C以上の高温が必要であり，また，②"玉だれのこがめ"という言葉が遠国の人にまで普及していた，ということは，技術的にも，初期の備前焼とは比較にならないほど進んでいたことがうかがわれる。

ともかく，この四耳壺は，室町中期を代表する，備前焼の1級資料である。

㊀　は，全体に比べて小さく，やや開きぎみの玉縁である。その小さい口から広くがっしりと張り出した，肩から胴にかける線は，非常に豪快である。そして，器胎の色は，主としていわゆる"備前焼の赤褐色"であるが，黒味がかった所や白味がかった所などもあり，バラエティーに富んだ美しさがある。また，ビードロは，四耳のある肩全面にべっとりとかかり，とどまりきれなくなったものが柳状に流下している。色は，やや緑がかった朽葉色である。

銘の字は非常に立派で，この壺の注文者であった「教舜」が窯元へ出向き，作られたばかりの軟かい器面に書いたものであろう。

銘文
備前国伊部村
小幡山長法寺
谷之坊教舜之也
文明十二年卯月二十四日

岡山市一宮　秋山雅人氏蔵
岡山市指定重要文化財

高さ	42.0cm
口径	15.0cm
胴径	34.6cm

受　贈　御　礼

◦旧岡山藩士浦上家の資料約50点	京都市	津川　義政氏
◦舟大工道具	邑久町	邑久高等学校
◦旅行用提灯	岡山市	村上　和雄氏
◦だつ（ふご）	久米南町	有本　光二氏
◦かつぎ・ふくさ	津山市	小坂田崇子氏
◦手　箕	美星町	妹尾　貢一氏
◦高　機	建部町	杉山　護氏
◦いも切機	〃	森　安氏
◦高瀬舟の鑑札	柵原町	秋山　栄氏
◦食篭・木椀・ニコニコランプ	岡山市	田中　孝氏

岡山県立博物館だより　No. 7
発行者　昭和50年3月20日
発行者　岡山県立博物館
館長　村井董直
岡山市後楽園1－5
TEL(岡山)72—1148